

蘇
氏
名
讀
一
四
經

兩

点

むのふ附

此書ハ十四經發揮と讀易平仮名と
加(文句の難をわかに其譯と悉記し
初に書療法を行ふると明ふるむ

假名讀十四經

文政堂藏

假名讀十四經題言

其十四經數抑ハ元の至正元年に清壽字伯仁と
つゝ名聲の著るるふて本朝の醫家も亦復一人
も用ふるものなり然るに其書と讀く遂に宣記
而後師傳と授くるに則ち十四經に達する此微ふ
達すると疊の根本とん抑鍼灸の術ふかゝる此法
と知らずんば何とば病を救んや何と以て醫療
をやとせんや初學者の人の初むべきの急なるを
吾友八田春樹ハ徑徑に之を用ふる久し
醫學のけしきと讀者多し然といふも漢文ハ

初心の句讀もたゞりく其勞と助記憶んとして
文字と次第に双べ又文義の通じたるもの
たに國恩之訓と附而義理とをうりり此書
の標題と吾に号し吾亦嘆曰これ此國恩の
文体に書並く愚蒙の初學に備ふもの故假名
讀十四經と題号べし此謂也と云
文化二年乙丑歲春

長澤丹陽軒主人識



十四經絡發揮

十四經絡發揮者十四經絡と發揮する也經絡は人身
に在る手の三陰三陽足の三陰三陽凡そ十有二に而
十四と云ふもの仕督の二脈と併て云ふ仕督の二脈は
併言仕脈は腹と直行督脈は背と直行も腹背の中
行は諸穴系所なり手の太陰は肺の經左右各十一
穴足の太陰は脾の經左右各二十一穴手の陽明は大
腸の經左右各二十穴足の陽明は胃の經左右各四
十五穴手の少陰は心經左右各九穴足の少陰は
腎經左右各二十七穴手の太陽は小腸經左右各十

九穴足の太陽ハ膀胱の經左右各六十三穴手の厥陰ハ
心包經左右各九穴足厥陰ハ肝經左右各十三穴手の少
陽ハ三焦經左右各二十三穴足の少陽ハ膽經左右各四十
三穴兼て仕脈の中行二十四穴督脈の中行二十七穴と以
人身周矣鑿者此と明以鍼一ツ可以灸一ツ可湯液と以之と
投つ可向所驗と取不さず無後世の鑿道ハ明カ不古先聖王
救世之術多ハ廢レ講不鍼灸湯液之法或ハ岐二為一或ハ參レ
三レ為一其又最下ハ則鍼行者百一灸行者者什二湯液行者
什一九二力一千萬レ抑何多寡之相懸ス耶或者以レ鍼ハ
衆レ者ハ多レ此と業ス者寡也噫果て是若ク亦淺矣哉其
心二用一也支鑿之病と治ス猶人二之水と治ス水の天地と行ス
猶血氣の人身二于行一也溝渠二會一可レ卯一川二實一皆其流二上一交
際之處或ハ壅レ或ハ塞レ或ハ溢レ皆以治スと害レ病レ成レ足
苟レ其嚮道二と明一不レ而レ之と治ス欲レ其二之一鑿二之行一至不
者ハ否也鑿之病と治ス一迎二隨三補一瀉一千一下一
宜一導一凡其和平と取所二ハの者一ハ亦是の若耳而レ經
絡不講レ置可レ乎一骨伯仁氏之憂一有故二之一圖二為一註と
為レ之一歌と為レ以之と發揮一周悉詳盡曲暢旁通レ後也
鑿者卷と披而焉と得可レ伯仁氏之心と用一亦深矣哉伯仁氏

に後く而て興者薛良武氏しやうりやうぶしの良武氏りやうぶし講究
其自得みづかひ所亦已に多矣乃ち復是書と校正し諸と梓に
刊て以て其傳と廣んと欲す是心と推に即ち伯仁氏之心也
良武名ハ鑑兵之長洲の人爲子有已曰者今鑿と以
南京太鑿事に判り尤外科と以名あり而も外科ハ
恃其一也君子其能家業と振と謂と云

嘉靖戊子の冬閏十月望日前の進士姑蘇西閭盛
應陽斯顯金陵の官寓于書と

十四經發揮の序

人ハ九臟之形と具而氣血の運必以之と疏載すと
有て其流注ハ則歷と曰循と曰經と曰至と曰抵と曰其交
際ハ則會と曰過と曰行と曰達と曰者ハ蓋所謂十二經有十二
經ハ左右の手足各陰陽と備者三陰ハ右而陽ハ左也陽ハ
順ハ布而陰ハ逆に施也三陽と以之と言ハ則太陽少陽
陽明陽既に太少有矣而て又陽明有者何兩陽
合明之義ハ取也三陰と以之と言ハ則太陰少陰厥陰
陰既に太少有矣而て又厥陰有者何兩陰
義ハ取也徒に經ハ十二有のみ非而も又所謂孫絡と云

者有焉。孫絡之數三百六十有五經。附之行周流而息不
所以也。陰陽維繫帶六脈。若至の固。皆繫屬する所有而唯
督任二經則腹背乎。苞而專。宥有諸經滿而溢する者。此則之と
受初常經に非く。謂て而忽に焉と。畧す可不法宜く諸經與並
論して通考とす。其際穴六百五十有七者。而治功と施則ハ鑿
之神祕盡矣。蓋古之聖人。至靈乎契。洞視して隱く無故に能
系脈之真と審ふ。一虚實之變と原名と建號と立人と使
識而之と治るむ。後世屢膜と挾筵と導幽と驗隱と索
に至く。雖卒に其範圍と越く。能不聖功之再セ不く
ある可。不經絡明め不而夫疾疾治めん欲て猶射と習
て予矢と操不る。其能不く也。決矣。濂之友滑君深
見所有此於内經骨空の諸論及靈樞本輸篇に述所の
經脈辭旨簡嚴くと。以讀者未即解易くは。是ふ於て其
字義と訓し其名物と釋し其本旨疏し其句讀と正し
釐て三卷と爲て名て十四經發揮と曰復隧宥之名記
憶し難と慮て聯て韻語と成各經之後於附其斯世於
功有也亦遠く不哉世之鑿書と著者日に新に月に
盛に繁且多し不に非也。漢之時僅に七家耳。唐に則
増て六十四爲宋に至て遂に一百七十有九に至其方

藥と發明する豈其人純内經と以本と爲而之雜弗者無
や抑何其鮮也金之張元素劉完素張從正李杲四家の
若へ其立言垂範殆と庶幾すると或者乎今吾滑君起而
之に繼凡四家の微辭私旨貫通と不とつと靡發揮と
作必將に其書與並傳と疑無べし嗚呼一身之氣機と
衆篇うて以補以偏以十全之功と成者ハ其唯針砭と
法乎若諸經於明り不とく之と誤施則ハ鋒刃と假不
而人と戕賊矣懼不可哉縱談と曰九針之法と傳
者蓋鮮苟も湯液と以之と云も亦必何の經邪に中と
絶と之と講と弗也滑君此書豈醫塗之典梁小非也歟
源の故に特小爲之序と以傳源滑君と知者ハ非ハ未
必其言と以過情と爲不るは滑君名の壽字ハ伯仁許
昌の人自號して櫻寧生と爲博經史諸家の言に通文
辭と爲溫雅法有尤鑒於深江南の諸醫未と先と
能と著所又素問欽難經本義有世于行難經本義雲
林危先生素堂之々序と云翰林學士亞中大夫知
制誥兼脩國史金華宋濂禮と序と

十四經發揮の序

文於天に觀者、宿度に非んば、以て政之行と措く、無
理於地に察す者、經水に非んば、以て九圍之域と別く、
無知夫人身、而經脈と明り、不べ。又烏榮衛之統所と
知哉。此内經靈樞之由作所也。竊嘗之と及に人、天地
之心、爲二材、蓋一氣也。經脈十二、以經水に應、孫絡
三百六十、有五、以周天之度に應、氣定、是に構て、以
周期之日に應、宜哉。榮氣之人身と榮る、晝夜環
周、天旋之度四十有九と轉、或ハ衛氣と謂其經と循
行、從て而る、亦未嘗相離也。夫日星殊々、雖天乎
麗所以の者、皆陽輝之昭著也。河海殊々、雖地中に行
所以の者、寔一水之流衍也。經絡交相貫屬と雖、人身
と周所以の者、一榮氣也。噫、七政度と失、則災青見
焉。經水道と失、則冷熱作焉。經脈常と失、則所生
是動之疾、是に繇而成焉。故と以て鍼石と用者、必俞穴と
明り、閭闔と審み、因虚實と以て之と補瀉と。此經脈
本輸之旨、尤當心と究べ。靈樞世に註本、無學者焉と
病許昌、滑君伯仁、父嘗十四經發揮と著、手足三陰
三陽及仕督と疏也。其圖章訓釋と觀に、綱舉目張

以學者出入の嚮方と爲に足寔に鑿門之司南也。既に
成て將に梓ハナ以傳ハナん余と徴て其作所の意と叙
余不敏うて輒ち三昧一氣之説と書ハナく。以之と歸若
經絡筋骨の度と別屬のハナん。則此に備に論ずる暇
あり不也。時に至正甲辰中秋の日。四明の呂復養生主。
栗騎山之樵舍于書ハ

自序

人の血氣之屬爲飲食起居節宣微爽疾無不能不疾之
人と感或ハ内或ハ外或ハ小或ハ大是動と爲病と生
所以爲感五臟六腑手足陰陽に出不聖智の者思と興
以之と治ずると有是に於而入者ハ是に於之出上古病
と治ずと湯液醪醴甚少と爲其疾有ハ平丈夫空穴經隧
の統繫所と取支邪之中所陰爲陽爲と視て之に灸
刺く。以其苦所と驅去内經に鍼所と觀に服餌之法
繼に一二灸爲者四三其它ハ則鍼刺と明く無慮十
八九鍼之功其大矣。厥後方藥之說肆に行鍼道ハナく。

論不灸法、亦僅而存、と獲鍼道微に而經絡之爲に
明、不經絡明、不則邪之所在と知不法と求て
動、の機會に中、必捷、と響の如、亦難矣、昔軒轅岐
伯氏、介問春の若、經絡也、始末と明、孔、之、分、す、と
相、幽、と探、遠、と摘、柳、方、冊、に在、亦天下也、治と爲者として
天下之疾、視、以其七情六淫也、自所と究、有及、以、夫、某
某經之陷下、爲、某、某經之虛、若、實、と爲、補、瀉、可、某、某經
之表裏、爲、汗、可、下、可、と察、之、と鍼之と灸之と藥
之と餌、施、て可、不、と、無、有、使、欲、夫、頻、盛
呻吟と免、得、と抑、已、備、矣、遠、古、之、書、淵、乎、て深哉、初、學
於、或、未、易、と乃、靈、樞、經、本、輸、篇、素、問、骨、空、等、の論、と以、
哀、而、之、と集、經、十二、任、督、脈、と得、云、腹、背、と行、者、二、其、遠
穴、之、身、於、周、者、六、百、五、十、有、七、其、陰、陽、之、往、來、す、所、以、
と致、其、骨、空、之、駐、會、と、所以、と推、圖、章、訓、釋、綴、に韻語
と以、一、釐、三、卷、と爲、之、と目、て十四、經、發揮、と曰、庶、幾
乎、前、人、之、萬、々、一、と發、て、且、以、初、學、に示、者、是、に於、而、出、
入、之、嚮、方、也、烏、乎、圖、と致、て、以、其、源、と竈、文、に因、て、以、其、
義、と求、尚、前、人、之、心、に戾、不、後、也、君子、其、勤、と察、て、其、速、
不、と正、是、望、所、也、至、正、初、元、閏、月、六、日、許、昌、の滑、壽、自、序

凡例

一十二經列其所の次第並に流注之序と以て之を先後と爲附に任督の二奇と以て之を者。其專穴有と以て之を之と總て十四經と爲と云

一註者經を釋する所以也其訓釋之義に凡三有焉字と訓す一の義也身體府藏名物と釋す一の義也經と解一の義也其穴法分すと載る則圖以之と別

一各經既に本經に於詳る註する處其他經有交會する所の處但云其經に見るを必復贅す

一經脈流注本經に歷る曰膺曰至曰抵曰其交會者會と曰過と曰行と曰其或ハ經行之處既本穴に非又交會に非則字例と以之と統不

一奇經八脈十二經之常道有々若々ハ雖亦諸絡脈之微妙の若々ハ非任督二脈也直行之者既已之と十四經に列る其陰陽維蹻衝帶の六脈と則別に編末に具々以參考に備

凡例畢

目錄

上卷

手足陰陽流注篇

中卷

十四經脈氣發所

下卷

奇經八脈篇

仰人尺寸之圖



伏人尺寸之圖



十四經發揮卷上

手足陰陽流注の篇

許昌擬寧生滑壽伯仁著
吳郡會仁薛鍾良武按刊

凡人の兩手足各三陰の脈三陽の脈有以合之十二經と爲也。

三陰ハ謂太陰少陰厥陰三陽ハ謂陽明太陽少陽也
人の兩の手足各三陰の脈三陽の脈有相合て十二
經と爲也手の三陰ハ謂太陰ハ肺經少陰ハ心經厥
陰ハ心包經手の三陽ハ謂陽明ハ大腸經太陽ハ少
陽經少陽ハ三焦經足の三陰ハ謂太陰ハ脾の經少
陰ハ腎經厥陰ハ肝經足の三陽ハ謂陽明ハ胃の經

太陽の膀胱經、少陽の膽經之と經を謂ひ、血氣流行、
經常息不者と以て言之。之と脈と謂者、ハ二理分表と
體と行者と以て言也。

手之三陰ハ藏從走手に至、手之三陽ハ手從走て頭に
至、足之三陽ハ頭從下走て足に至、足之三陰ハ足從上
走て腹に入。

手三陰ハ藏從走て手に至、謂手太陰ハ中焦に起、至
て大指之端に出、手の少陰ハ心中に起、小指之端に
至、出手の厥陰ハ胸中に起、至て中指之端に出、手の
三陽ハ手從走て頭に至、謂手の陽明ハ大指の

次指之端に起、至上鼻孔と挾、手の太陽ハ小指之
端に起、目の内眥に至、手少陽ハ小指次指之端に起
て、目の銳眥に至、足の三陽ハ頭從走て足に至、謂足
の陽明ハ鼻に起、中指の内間に入、足の太陽ハ目
の内眥に起、小指の外側の端に入、足の少陽ハ目の
銳眥に起、小指次指の間に入、足の三陰ハ足從走
て腹に入、謂足の太陰ハ大指之端に起、至て脾に屬
胃と絡、足の少陰ハ足心に起、至て腎屬、膀胱と絡、
足の厥陰ハ大指の聚毛に起、至て肝に屬、膽と絡、
足の三陰ハ足從腹に入と曰、雖、然、トモ太陰ハ乃

復膈に上て咽と挾舌下に散す。以陰の乃ら復腎從
上て舌本と挾し。厥陰の乃ら復上て額に出手。督脈與
巔に會し。兼て手の太陰の肺系從横に腋下に出手。
の少陰の心系肺の上腋下に出手の厥陰の胸に循
脇に出手。上て腋下に抵此。又秦越人所謂諸陰脈皆頸
臂に至て還者也。而も厥陰の則又上て巔に出蓋厥
陰の陰の盡也。然所以の陰の盡可無の理と示亦猶
易の碩の果食不陽の盡可之義無しと示然とも易
の陰陽の氣と以言人身の陰陽の藏象と以言氣の
則形無而藏象の實有氣の陽なり。實陰也。然の則ち
形無者の陽乎。貴實有者の陰と貴歟。

絡脈傳主周流一息也

絡脈者十二經の旁支に而別に以十二經と聯絡す
者也。本經の脈の絡脈に由他經に交他經之交も亦
是に由傳注周流停息有し無夫十二經之絡脈有ハ
猶江漢の它替有と絡脈の他經に傳注する猶它替
之旁他水と導と是と以手の太陰の支者腕後從
次指の端出手の陽明に交手の陽明の支者缺盆從
上て口鼻と挾し。足の陽明に交足の陽明の支者
跗に踵上り大指の端に出足の太陰に交足の太陰

也。支の胃從別て膈に上。心中に注。て手の少陰も交。
手の少陰。則ち直に本經少衝の穴。自手の太陽に
交。支授と假不蓋君の令と出者也。手の太陽之支者。
別に頰上より目の内眥に至て足の太陽に交。足の
太陽之支者。膈内從左右別下て膈中に合。下小指の
外側の端至て足の少陰に交。足の少陰之支者。肺從
出。膈中注。て手厥陰に交。手の厥陰之支者。掌中從小
指の次の指に循て其端に出。手の少陽之支者。耳後
從出。目の銳眥に至。足の少陽も交。足の少陽之支者。
跗上從大指の爪甲に入。三毛出而足の厥陰に交。
足の厥陰之支者。肝從別て膈と貫き上て肺に注。て
手の太陰交る也。

故に經脈者血氣と行。陰陽と通。以身と榮とる者也。
通。上の文と結。以下の文の義と起。經脈之
流行して息不者血氣運行。陰陽と流通。以人
身と榮養所以者也。絡脈と言不者。經と攀以之。該
其始中焦從手の太陰陽明に注。陽明足の陽明太陰に
注。太陰手の少陰太陽に注。太陽足の太陽少陰に注。手
の心主少陽に注。少陽足の少陽厥陰に注。厥陰復還て
手の太陰に注。

中焦より始めて手の太陰に注、足の厥陰に注、終は經脈之行、身と一周する也。

其氣常に平旦と以て紀と爲、旬以て漏水の下と百刻、晝夜流行、天與度と同一終而復始也。

氣ハ營氣紀ハ統紀也。上の文と承て言、經脈之行、其始ハ則ち中焦自起、其氣則ち常に平旦と以て紀と爲、營氣常に平旦之寅の時と以て紀と爲、中焦に由始、手の太陰に注、次と以て流行する也。血と言不者ハ氣行則ハ血行と知可漏、水下と百刻、晝夜流行、天與度と同一もの言、一晝夜漏下百刻之内、人身之經

脈流行竊止する有、無天與同一運行也。蓋天は三百六十五度四分度也。一と以て一周天と爲、而一晝夜終、人之榮衛ハ則ち五十度と以身と周、氣行一萬三千五百息、脈行八百一十丈、而一晝夜終て適明日之寅の時、に當て、復手の太陰に會、是天與度と同一終て復始也。或ハ云、晝夜漏刻長短有其營氣盈縮、當に何如然、漏刻短長之殊、有と雖而五十度周身と者、均其中に在漏刻に因、不而盈縮有也。右本篇正文、金蘭循經與同。

十四經發揮卷中

十四經脈無所發篇

手の太陰肺經之圖



手太陰肺經の穴歌

あふろのろのろ

手の太陰肺十一穴中府雲門天府列缺俠白尺澤孔最存列缺經渠太淵少商

韭菜葉の如

手太陰肺之經

十一穴左肘上二寸

肺之藏爲

六葉兩耳四に垂て蓋の如

脊之第三の

推ふ附著と中に二十四空有行列

諸藏清濁之

氣と分布と五藏の華蓋と爲と云

手太陰之脈中焦に起下て大腸に絡還て胃口と循

膈ふ上て肺に屬と

起る發也路は繞也還は復也循は巡也又依也治也

屬は會也中焦は胃の中脘に在臍の上四寸之分に當

大腸註は本經に見えり胃口は胃の上下の口也胃

の上口は臍上五寸上脘の穴に在下口は臍上二寸

下脘の穴之分に在也膈者隔也凡人の心下膈膜有

脊脇與周圍して相着て濁氣と遽隔して上心肺に

薰せ使不所以たり手の太陰の中焦に起足の厥陰

の交と受是に由て仕脈之外足の少陰經脈之裏と

循次と以下行し臍上一寸水分の穴之分に當て大

腸と繞絡と手の太陰陽明表裏相爲乃復本經之外

に行上胃口と循還逆して膈に上而して肺に屬會

膈に上而して肺に屬會

そ榮氣本臟歸する所有也

肺係從横に腋下出下て膈内と循以陰心主之前に行
肘の中に下

肺系ハ謂喉龍也喉ハ以氣と候下肺ハ接と肩下
脇上の際腋と曰膊下腋に對する處膈と為肩肘之
間也膈の盡處肘と為肘ハ臂の節也肺臟肺子と循
て出而横行一々胃部第四行之中府雲門と循て以
腋下に出下て膈内と循天府俠白と歷手の少陰手
心主之前に行て下て肘の中に入尺澤の穴に抵蓋
手少陰膈臂と循て手の少指之端に出手の心主ハ
膈臂と循中指之端に出手の太陰ハ則ち二經之前
に行也○中府の穴ハ雲門の下一寸乳の上三肋の
間動脈手に應ざる陷る中に在雲門ハ巨骨の下
氣戸の傍と使る二寸陷る中に在動脈手に應
る臂と舉て之と取天府ハ腋下三寸膈の内廉動脈
の中に在俠白ハ天府の下肘と去く五寸動脈の中に
在尺澤ハ肘中の約文の上動脈の中に在
臂の上骨の下廉と循てす口に入魚の上魚際と循
大指之端に出

肘以下臂と為廉ハ隅也邊也手掌後高骨の傍動脈

關と爲關前の動脈とす口爲魚と曰魚際と曰云者
謂掌骨之前大指本節之後なり其肥肉隆起之處統
て之と魚と謂魚際ハ則其間之穴の名也既に肘中
に下乃ち臂内上骨之下廉と循孔最列缺と歷寸口
之經渠太淵に入以て魚に上魚際と循て大指之端
に出少商の穴小至て而終也端ハ杪也○孔最
の穴ハ腕上と去七寸列缺ハ腕の側の上と去
一寸五分手と以て交叉して頸指の當に食指末筋
骨縛中の絡穴也經渠ハ寸口陷なる中に在太淵ハ
掌後陷中に在魚際ハ大指本節の後内側散脈の中
に在少商大指の端の内側爪甲と去韭葉の如
白肉の内宛宛る中に在

其支する者ハ腕後從直に次の指の内廉に出其端
臂骨盡處腕爲脈之大脈と經と爲交經の者ハ絡
と爲本經大指之端ハ出に終矣此則ハ腕後列缺の
穴從次指の内廉に達し其端に出而手の陽明に交
是動する則ハ病肺脹滿膨膨と而喘欬し缺盆の
中痛甚しん則ハ兩手に交て脊此臂厥と爲是肺
と主とる所生の病ハ咳嗽上氣喘喝煩心胃滿膈
臂の内前廉痛掌中熱氣盛に餘有則ハ肩背痛風

寒^{かん} 汗^{あせ} 出^で 中^{ちゆう} 風^{ふう} 小^{せう} 便^{べん} 數^{すう} 而^り 欠^け 一^{いつ} 虛^{きょ} 者^{もの} 則^{すなは}
 肩^{かた} 背^せ 痛^{いた} 寒^{かん} 少^{せう} 氣^き 以^{もつ} 息^{いき} 足^{あし} 不^ふ 溺^{よく} 色^{しき} 變^{へん} 卒^{そつ} に 遺^い
 失^{しつ} 度^た 無^む 盛^{さん} 者^{もの} 口^{くち} 大^{だい} 人^{じん} 迎^{むか} に
 三^{さん} 倍^{ばい} 者^{もの} 口^{くち} 反^{はん} 人^{じん} 迎^{むか} 小^{せう} 也^{なり}

手^て の 陽^{やう} 明^{めい} 大^{だい} 腸^{ちゆう} 經^{けい} の 圖^ず



手陽明大腸經の穴の歌

手の陽明の穴、商陽に起。二間、三間、合谷、藏陽谿、偏歷、溫溜と歷。下廉、上廉、三里、長曲、池、肘髎、五里と迎臂臑、肩髃、巨骨、當、天鼎、扶突、禾髎、接、終に迎香と以て二十穴。

手陽明大腸之經 ○是の經氣血俱に多し

大腸の長二丈一尺、廣四寸、臍の右に當て廻り十六曲、手の陽明之脈は、大指の次指之端に起、指の上廉に循、合谷、兩骨之間に、出上て兩筋之中に入。

大指の次指は、大指の次指なり。謂食指也。手の陽明

大腸經也。凡經脈之道、陰脈は手足の裡に行、陽脈は手足之表と行。此經大指の次指之端、商陽の穴に起。手の太陰之交と受て、陽之分に行。是由指の上廉と循二間、三間と歷、以て合谷、兩骨之間に、出復上て陽谿、兩筋之中に入。○商陽は手の大指、次指の內側、在、孤甲の角と去。韭菜の如し。二間は手の大指、次指の本節の前、內側陷る中に在。三間は手の大指、指の次指本節の後、內側陷中に在。合谷は手の大指、の次指、歧骨の間、陷中に在。陽谿は腕中の上側、兩筋の間の陷中に在。

臂の上廉と循肘外廉に入。臑外前廉と循て肩に上

陽谿自而上。臂の上廉之偏歴溫溜。下廉上廉三里

と循て肘の外廉之曲池。入臑外の前廉と循肘膠

五里。臂臑と歴臑會と絡肩に上。肩髃の穴ふ至也。○

偏歴の腕中の後三寸に在。溫溜の腕後小士の六寸

大士五寸にあり。下廉の輔骨の下。上廉と去一す

ふ。上廉の三里の下一す。三里の曲池の下二

寸と按。肉起にあり。曲池の肘外の輔骨にあり。

肘と屈曲骨之中手と以て臂に拱。ちと之と取。肘髃

の肘の大骨の外廉の陷。中にある。三里の肘の

上三す。あり。裡に向。大脈の中央。行臂臑の肘

上七す。あり。臑會の手の少陽經に見。あり。手の陽

明之絡也。肩髃の肩端兩骨の間陷。あり。者宛宛。あり。

中。あり。臂と舉。あり。空。あり。

髃骨の前廉。ふ出。上。て柱骨之會上に出。

肩端兩骨の間。髃骨と為。肩胛の上の際。會處。天柱骨

の。髃骨前廉。ふ出。巨骨の穴と循。上。て柱骨之會上

に出。大推の會。○巨骨の穴の肩端上行。兩叉骨の

間陷中。あり。大推の督脈。ふ見。あり。手足の三陽督

脈之會。

下て缺盆入肺と絡膈と下。大腸入屬ハ

大推自下缺盆に入足の陽明の經脈の外と循肺臟
と絡膈と復膈に下。天樞之分に當て會ハ。大腸入屬
ハ。○缺盆天樞ハ足の陽明經に見ヨリ

其支別者缺盆從頸ハ上テ頰と貫キ下齒の縫中ハ入
頸莖と頸為耳以下曲處と頰ヲハ口前小ヲ入。齒
と。其支別ハ缺盆ヨリ頸に上行ハ。天鼎扶突と循
上テ頰と貫キ下齒の縫中ハ入。○天鼎ハ頸ヨリ
缺盆ハ直に扶突の後一す。扶突ハ氣舎の後一す五
分ヨリ。仰而之と取。又云。人迎の後一す五分ヨリ
還出。口と挟人中ハ交ル。左ハ右ハ右ハ左に也。上
テ鼻孔と挟

口脣の上。鼻柱の下と人中ハ既ハ齒縫に入。復出て
兩の口吻と夾人中の分ハ相交左脈ハ右に也。右脈
ハ左ハ之上テ鼻孔と挟。木膠迎香と循テ終テ以テ
足の陽明ハ交ス也。○人中の穴ハ督脈に見ヨリ。手
の陽明督脈之會也。木膠ハ鼻孔の下。水溝の旁に
接。五分ヨリ。迎香。木膠の上一す。鼻孔の旁ハ
五分ヨリ

頰字誤之頸也

是動。口ハ則チ病。齒痛。頰腫。是津液と主ス

所生病者。目黄。口乾。身大熱。反欲得近人者。不可與熱湯。身大寒。反欲得近火者。不可與冷湯。身大熱。欲得近人者。不可與熱湯。身大寒。欲得近火者。不可與冷湯。

定の陽明胃經之圖



足の陽明胃經穴の歌

四十五穴足の陽明承泣。四白巨髎經地倉大迎頰車
時。下關頭維人迎對。小突氣舍缺盆に連。氣戶庫房屋翳也。膺窓乳中乳根に延。不容承滿梁
門起關門太乙滑肉門天樞外陵大巨存。水道歸來
氣衝次髀關伏兔陰市。走梁丘犢鼻足の三里上巨
虛條口の位に連。下巨虛與豐隆に及。解谿衝陽
陷谷の中内庭厲兌經穴終。

足陽明胃の經

凡四十五穴左右共に九十
是經氣血俱に終

胃の穴一尺五寸。肝曲屈伸長二尺六寸

足の陽明之脈。鼻へ起。頰の中に交。旁ら太陽之脈
に約。下て鼻外と循。上齒の中に入。還出て口と狹
て脣と環下て承漿に交る

頰へ鼻莖也。鼻の山根と頰。足の陽明ハ鼻の兩
旁迎香の穴へ起。是へ由て左右ハ上頰中に相交る。
晴明之分と過下て鼻外と循。承泣四白巨髎と歷て
上齒の中へ入。復出て地倉と循。両口吻挾脣と環繞。下
て左右承漿之分に相交る也。○迎香ハ手の陽明經
の穴。晴明ハ足の太陽經の穴。手足太陽ハ陽足の陽
明五脈之會。承泣ハ目下七分に直瞳子にあり。四白

へ目下一寸直瞳子あり。巨髻ハ鼻孔の旁ら八分
直瞳子あり。地倉ハ口吻の旁ら四分と挾承漿ハ任
脈ふ見あり。足の陽明任脈之會あり

却て頤の後の下廉と循大迎ハ出頰車と循て耳前
上客主人ハ過て髮際と循て額顙に至る

腮の下と頷といふ。頷中と頤といふ。顙前と髮際といふ。髮
際の前と額顙とも承漿より却て頤の後の下廉と
循大迎に出頰車と循て耳前ハ上下關と歴客主人
と過髮際と循て懸釐顙厭之分に行頭維と經額顙
之伸庭に會て○大迎ハ曲頷の前一寸三分。骨の陷

中の動脈あり。頰車ハ耳下曲頰の端陷中より下
關ハ客主人の下耳前動脈の下廉にあり。口と合そ
まは空あり。口を開てハ聞客主人懸釐顙厭の三穴
並に足の少陽經皆手足少陽陽明之交會頭維ハ額
角髮際本神の旁ら一寸五分に神庭の旁ら四寸五
分あり。神庭の穴ハ督脈不見あり。足の太陽陽明
督脈之會

其枝別者大迎の筋從人迎ハ下喉嚨と循缺盆に入膈
に下胃ハ屬脾と絡

胃の兩旁高處膺といふ膺の上橫骨巨骨といふ巨骨の

上陷中と缺盆と其支別者大迎の前より人迎に
下喉嚨と循て水突氣舎と歴缺盆に入足の少陰俞
府之外と行膈ふ下て上腕中腕之分當て胃ふ屬
脾と絡○人迎ハ頸の大脈ふより動トく手に應
結喉の旁に挾一寸五分水突ハ頸の大筋の前直
に人迎の下氣舎の上ふより氣舎ハ頸の直人迎の
下天突と挾て陷中ふより缺盆ハ脊下の横骨陷中
ふより俞府ハ足の少陰の經に見たり上腕ハ任脈
に見より足の陽明手の太陽任脈之會中腕ハ任脈
ふ見より手の太陽少陽足陽明生る竹任脈之會
其直行ハ缺盆より乳の内廉ふ下て下し臍と挾る氣
衝の中に入る

直行者缺盆より而して下乳内廉ふ下て氣戸庫旁
屋翳膺窓乳中乳根不容承滿梁門關門太乙滑肉門
と循て下て臍と挾天樞外陵大巨水道歸來の諸穴
と歴る氣衝の中に入也○氣戸ハ巨骨の下俞府の
旁ら一寸陷中より中ふより庫房ハ氣戸の下一寸六
分陷中より中より仰而之と取屋翳ハ庫房の下二
寸六分陷中より中より仰而之と膺窓ハ屋翳の
下一寸六分陷中より中より乳中の穴ハ乳ふ當る

是乳根の穴ハ乳の下一す六分陷る中より仰
而之とる。不容ハ幽門の旁に相去る一す五
分より承滿ハ不容の下一すより梁門ハ承滿
の下一すにあり。關門ハ梁門の下一すにあり。太乙
ハ關門の下一すより。膈肉門ハ太乙の下一すに
あり。下臍と一校天樞ハ臍と一校二すにあり
外陵ハ天樞の下一すより。太乙ハ外陵の下一す
にあり。水道ハ大巨の下三すより。歸來ハ水道の
下二すにあり。氣衝一名ハ氣街歸來の下鼠蹊の上
一す動脈手ハ應下死穴より中より。氣戸より池

根に至る中より。不容より。滑肉門に至る中より。
三。天樞より。歸來に至る中より。二。其文より。胃の下口より。起腸裡と循下氣衝の中至合

胃の下口ハ下腕之分難經云大倉の下口と幽門
と為者是也。胃ハ屬る處より。胃の下口より。起腹裏
と循る足の少陰の盲俞之外。本經の裏と過る。下氣
衝の中に至る前之氣衝に入者與合

以て驛關を下て。伏兔に抵下膝臍の中より入下髀の外
廉と循る足の跗より下中指の外間より入

抵ハ至るより。股外と驛より。驛前膝の上。起肉の處と

伏兔^{ふくう}とて伏兔の後交文と髀關^{ひくわん}と膝解^{ひざげ}の中とに
授臑^{じゆなう}と脛骨^{けいこつ}と筋^{しん}と踵^{かかと}の足面^{あしづら}あり。既に氣衝^{きしやう}の
中に相合^{あひあは}ふ乃ち髀關^{ひくわん}の下^{した}に伏兔^{ふくう}ふ抵^{いた}り陰市^{いんし}梁丘^{りやうきう}
と歴^をて下膝臑^{したひざなう}の中^{うち}に入^いり。犢鼻^{とくび}と經^を下^{した}て筋^{しん}の外廉^{ぐわいれん}之^を
三里^{さんり}巨虚^{こきょ}の上^{うへ}廉^{れん}條口^{じょうこう}巨虚^{こきょ}下^{した}廉^{れん}豐隆^{へいりゆう}解谿^{げき}と循^{したが}り足
趾^{あしづ}之^を衝陽陷谷^{しやうやうくわんこく}に下^{した}て中指^{ちゆうし}の外間^{ぐわいかん}之^を内庭^{ないてい}に入^いり。厲兌^{れいたい}
ふ至^{いた}て終^は也^{なり}。○髀關^{ひくわん}ハ膝上^{ひざかみ}伏兔^{ふくう}の後交文^{のこうかうぶん}の中^{のちう}ふあり。
^{一作交分}伏兔^{ふくう}ハ膝上^{ひざかみ}六寸起肉^{ろくすんしきにく}ふあり。正^{ただ}しく跪坐^{くわいざ}で
^{に作る}之^をと取^と一^{ひと}云^{いふ}膝蓋^{ひざがさ}の上^{うへ}七寸陰市^{いんし}ハ膝上^{ひざかみ}三寸伏兔^{ふくう}の
不陷^{ふくわん}する中^{のちう}にあり。絳^{じやう}而^{して}之^をと取^と梁丘^{りやうきう}ハ膝上^{ひざかみ}二寸兩

筋^{しん}の間^{のちう}ふあり。犢鼻^{とくび}ハ膝臑^{ひざなう}の下^{した}髀骨^{ひこつ}の上^{うへ}骨解^{こつげ}大筋^{だいしん}
の中^{のちう}ふあり。三里^{さんり}ハ膝眼^{ひざがん}の下^{した}三寸胛骨^{びこつ}の外大筋^{ぐわいだいしん}の
内宛宛^{ないわんわん}する中^{のちう}にあり。足^{あし}と舉^あぐる之^をと取^と極^{ごく}て重^{おも}く。
之^をと按^おふ則ち踵^{かかと}上の動脈^{どうみやく}止^やめ巨虚^{こきょ}の上^{うへ}廉^{れん}ハ三里^{さんり}
の下^{した}三寸にあり。足^{あし}と舉^あぐる之^をととる。條口^{じょうこう}ハ下廉^{したれん}の
上一^{ひと}寸にあり。足^{あし}と舉^あぐる之^をととる。巨虚^{こきょ}の下^{した}廉^{れん}ハ上^{うへ}
廉^{れん}の下^{した}三寸ふあり。足^{あし}と舉^あぐる之^をととる。豐隆^{へいりゆう}ハ外踝^{ぐわいこう}
の上^{うへ}八寸ふあり。筋^{しん}の外廉^{ぐわいれん}陷^{くわん}たる中^{のちう}ふ下^{した}て別^{わか}れ太
陰^{たいいん}に走^はる。解谿^{げき}ハ衝陽^{しやうやう}の後^{のちう}一^{ひと}寸五分腕上^{わんじやう}の陷^{くわん}あり。
中^{のちう}ふあり。衝陽^{しやうやう}ハ足^{あし}の踵上^{かかとじやう}五寸骨間^{こつかん}動脈^{どうみやく}陷^{くわん}谷^{こく}と去^さ

三すふあり。陷谷ハ足の大指の次指の間本節の
後の陷なる中ふあり。内庭ハ足の大指の次指の外
間陷なる中にあり。厲兌ハ足の大指の次指爪甲を
去く。韭菜の如きふあり。

其支者膝ふ下。三すふて別て以て下て中指の外間入
此支ハ膝下三すより。三里の穴の外と循別行而下
て中指の外間入。前之内庭厲兌與合也。

其支者跗上より別て大指の間ふハ其端ふ出

此支ハ跗上衝陽の穴自別行て大指の間ふ入。斜ふ足の
裏陰行間のわの外ふ出。大指下と循其端ふ出。以足の太陰小

走動則病。瀉瀉然。振寒善伸。數々。瀉黑病至

則人火と惡未音と聞バ。惕然と驚心動。欲獨

戸牖と閉而處。甚則高ふ上て歌衣と棄走。言嚮を

欲腹脹是肝厥也。是血主所生病ハ狂瘡。溫至汗出。飢

衄口喝唇。形頸腫。喉痺。大腹水腫。膝腫。腫痛。膺乳氣

街股伏兔。肘外廉足の跗上と循皆痛。中指用れ也。

氣盛からる身以前皆熱。其胃に餘有則ハ穀と消。上

善飢。病の色黄かり。氣不足から則ハ身の以前皆寒。寒

て胃中寒。下則ハ脹滿を感る者ハ人迎大からす。口

み三倍と虚から者ハ人迎反てす。口より小也。

足の太陰脾經之圖



足の太陰脾經穴の歌

二十一穴太陰脾隱白大都太白隨公孫商丘三陰交
漏谷地機陰陵陽血海箕門衝門開府舍腹結大橫排
復哀食竇天谿に連る胃郷周榮大包隨

足の太陰脾之經凡二十一穴左右各十二穴

脾の廣三寸長と五寸大倉と掩乎脊之第十一椎に
附著し

足の太陰之脈大指之端に起指の内側の白肉の際と
循る。靨骨の後と過て内踝の前廉に上る

靨骨一へ核骨に作俗云孤拐の骨是也足の跟の後

面^{めん}旁^{ぼう}の起^き骨^{こつ}と踝^か骨^{こつ}と。足^{あし}の太^{たい}陰^{いん}へ。大^{だい}指^{しゆ}之^の端^{たん}隱^{いん}白^{はく}の
穴^{あな}に起^{おこ}る。足^{あし}の陽^{やう}明^{めい}之^の交^{かう}と受^う也^{なり}。是^{こゝ}より大^{だい}指^{しゆ}の
内^{うち}側^{がは}白^{はく}肉^{にく}の際^{さい}大^{だい}都^との穴^{あな}と循^よ核^{かく}骨^{こつ}の後^{のち}と過^すて大^{だい}白^{はく}公^{こう}
孫^{そん}商^{しょう}丘^{きう}と歷^{れき}内^{うち}踝^か前^{ぜん}廉^{れん}之^の三^{さん}陰^{いん}交^{かう}上^{うへ}也^{なり}。○隱^{いん}白^{はく}へ足^{あし}
の大^{だい}指^{しゆ}の内^{うち}側^{がは}の端^{たん}より。爪^{つめ}甲^がの角^{かく}と去^さる。韭^{すい}葉^{えつ}
の如^{ごと}し。大^{だい}都^とへ足^{あし}の大^{だい}指^{しゆ}より。本^{もと}節^{せつ}の後^{のち}陷^{おち}る中^{うち}より。公^{こう}孫^{そん}
より。大^{だい}白^{はく}へ。足^{あし}の内^{うち}側^{がは}核^{かく}骨^{こつ}の下^{した}陷^{おち}る中^{うち}より。公^{こう}孫^{そん}
へ。足^{あし}の大^{だい}指^{しゆ}の本^{もと}節^{せつ}の後^{のち}一^{ひと}すより。別^{べつ}て陽^{やう}明^{めい}へ走^{そう}
商^{しょう}丘^{きう}へ。足^{あし}の内^{うち}踝^かの下^{した}微^ひ前^{ぜん}陷^{おち}る中^{うち}にあり。三^{さん}陰^{いん}交^{かう}
へ。内^{うち}踝^かの上^{うへ}三^{さん}寸^{すん}。骨^{こつ}下^{した}の陷^{おち}る中^{うち}にあり。

臑^{なう}内^{うち}へ上^{うへ}へ。胛^{へい}骨^{こつ}の後^{のち}循^よ之^の厥^{くわく}陰^{いん}之^の前^{ぜん}へ交^{かう}へ出^で。

臑^{なう}ハ腓^{へい}腸^{ちやう}也^{なり}。三^{さん}陰^{いん}交^{かう}より臑^{なう}内^{うち}へ上^{うへ}へ。胛^{へい}骨^{こつ}の後^{のち}之^の漏^{ろう}
谷^{こく}と循^より上^{うへ}行^{かう}ち二^に寸^{すん}。足^{あし}の厥^{くわく}陰^{いん}經^{けい}之^の前^{ぜん}へ交^{かう}へ出^で。
地^ち機^き陰^{いん}陵^{りやう}泉^{せん}へ至^{いた}る。○漏^{ろう}谷^{こく}ハ内^{うち}踝^かの上^{うへ}六^{ろく}寸^{すん}。骨^{こつ}下^{した}陷^{おち}る
中^{うち}より。地^ち機^きハ膝^か下^{した}五^ご寸^{すん}。陰^{いん}陵^{りやう}泉^{せん}ハ膝^か下^{した}の内^{うち}側^{がは}輔^ほ骨^{こつ}
の下^{した}胎^た中^{ちゆう}より。足^{あし}と伸^のて之^のと取^と。

上^{うへ}て膝^か股^この内^{うち}の前^{ぜん}廉^{れん}と循^よる。腹^{はら}へ入^い脾^ひに屬^{ぞく}し。胃^いと絡^{らく}
脾^ひ内^{うち}と股^こより。臍^{せき}の上下^{じやうげ}と腹^{はら}より。陰^{いん}陵^{りやう}泉^{せん}より。上^{うへ}膝^か
股^この内^{うち}前^{ぜん}廉^{れん}之^の血^{けつ}海^{かい}箕^き門^{もん}と循^よる。逆^{さか}還^{かん}して腹^{はら}へ入^い。衝^{しやう}
門^{もん}府^ふ舎^{しゃ}と經^{けい}中^{ちゆう}極^{ごく}關^{かん}元^{げん}へ會^あはる。復^ふ腹^{はら}結^{くわつ}大^{だい}横^{やう}と循^よる。下^{した}

腕ふ會ひ。腹ふ哀ふと歴ひ。日月期門の之分はと過本經の裏と
循ひて下りて中腕下腕の際は至る以て脾ふ屬し。胃と絡
也。○血海は。膝臑の上。内廉は。白肉の際は二寸中ふあり。
箕門は。魚腹の上。起筋の間。陰股の内。動脈の中あり。
衝門の上。大橫と去て五寸府舍の下。橫骨の端。約中
の動脈あり。府舍は。腹結の下。三寸あり。中極は。關元並
に任脈ふ見る。皆足の三陰任脈の會ひ。腹結は。大橫の
下一寸三分あり。大橫は。腹哀の下。三寸五分直臍の
旁あり。下腕は。任脈に見る。足の太陰任脈の會ひ。腹
哀は。日月の下。一寸五分あり。日月は。足の少陽經
に見る。足の太陰少陽陽維の會ひ。期門は。足の厥陰
の經ふ見る。足の太陰厥陰陰維の會ひ也。衝門は。府舍
腹結は。大橫は。腹哀の中。行と去る。各四寸半
膈ふ上り。咽と。揅は。古本と連き。舌下に散る

咽は。物と嚥る所は。喉の前ふ居る。胃ふ至る。長さ一尺六
寸。胃系と。古本は。古根也。腹哀より。膈ふ上り。食竇
天谿は。胸鄉は。周榮と循る。周榮より。外に。曲折して。下に
向ふ。大包ふ至る。又は。大包より。外に。曲折して。上に。向ふ。中府
に會ひ。上行して。人迎の裏ふ。行咽と。揅は。古本に
連る。舌下に散る。終焉。○食竇は。天谿の下り。一寸六

かあり。臂と舉るを取。天竅へ胃卿の下。一す六分に
あり。仰て之とる。胃卿へ。周榮の穴。一す六分陷る
中にあり。仰て之とる。周榮へ。中府の下。一す六分陷る
なる中ふあり。仰て之とる。大包へ。淵腋の下。三すふあり。
淵腋へ。足の陽中府へ。手の大陰經ふるなり。足の
明ふるなり。
大陰の會也。人迎へ。足の陽明經ふるなり。

其支別へ。復胃從別て。膈ふ上て。心中に注。

此支腹哀より別に行て。再び胃の部。中脘の穴の外
膈に上て。膈中之裏。心之かふ注。以て手の少陰ふ交。

○中脘。膈中並に任脈の穴。

是動するなり。病者本強く食するなり。嘔る。胃腸
痛。腹脹善んで噫。後と氣とと得るなり。快然して
哀するなり。身體皆重。是脾と主とと生るなり。所
の病者。古本痛も。體動搖るなり。能く食下るなり。
心へ下る。急痛も。寒瘧瘧。腹中水。下黃疸。臥る能
なり。強立股膝の内。瘧厥。それへ足の大指用るなり。
盛る者へ。す口大なるなり。人迎ふ三倍も。虚る
者へ。す口反て人迎より小也。

手の少陰心經之圖



手の少陰心經穴の歌

九穴手の少陰極泉青靈少海深一靈道通里陰郛遠

神門少府少衝尋

手の少陰心之經凡九穴左右共に十八

心經未敷る蓮華のく肺の下膈の上に居て腎

之第五椎小附著

手少陰之脈は心中小起り出て心系に屬し膈を下て

小腸と絡ふ

心系二つあり一は則ち上肺と相通ひ肺の兩大葉の

間に入り一は則ち肺葉より下り曲折して後ふらふ

脊脊ふ並細絡相連なり。脊體と貫りて腎に相通じ。
正に七節之間に當る。蓋五臓の系皆心に通じ。心の
五臓の系に通じ也。手の少陰の經心に起る。任脈
の外と循る。心系ふ屬。膈ふ下る。臍の上二寸が
ふ當て小腸と絡ふ

其支る者へ心系より上て咽と挟む。目ふ系る
支へ心系より任脈之外に出上行く。咽とく
目ふ系る也

其直る者へ復心系より却て肺ふ上る。腋下ふ出
直る者へ復心系より直ちふ上る。肺の臓之かに
至り出て腋下と循る。極泉ふ抵るなり。尤へ臂内腋
下の筋間動脈ふあり。臂ふ入る

下て臍内の後廉と循る。太陰心主之後に行。肘の内廉
に下る

極泉の下より。臍内の後廉と循る。太陰心主兩經
後に行き。青靈の穴と屋肘の内廉ふ下る。少海ふ抵
○青靈へ肘上三寸ふあり。臂と舉て之とる。少海へ
肘内大骨の外ふあり。肘の端と去る。五分

臂内の後廉と循る。掌後兌骨之端ふ抵る。掌の内廉に
入る。小指之内と循る。其端に出

腕下の蹠とて兎骨より少海より下臂内の後廉と
循て靈道通里と歷掌後兎骨之端に至る。陰郄神門
と經掌の内廉へ入。少府に至る。小指の端と少衝と
循て終る。以て手の太陽が交わり。心は君主の宮た
る。它藏より尊と示る。故に其交經接受を別と
假と云。○靈道の掌後一寸五分あり。通里は腕後
一寸陷たる中より陰郄は掌後の脈中。腕と去る五
分あり。神門は掌後銳骨之端陷たる者の中より。
少府は手の小指本節の後陷する中。直勞宮入り。少
衝は手の小指の周廉の端より。爪甲と去る。

建集のさ

是動とるゝとて病盛乾き。心痛渴して飲む。欲も是
臂厥をも是心と主と。所生病者。目黃。脇痛。臑
臂のの後廉痛。厥掌中熱痛。盛んるものす。口太
くろく。人迎に再倍を應とるものす。口反て人迎
より小也。

手の太陽小腸經之圖



手の太陽小腸經穴の歌

手の太陽の穴一十九少澤前谷後谿過腕骨陽谷
 養老曲池肩外復肩中天窻天容顴髎上耳中
 入聽宮小循ひ

手の太陽小腸の經ハ穴一十九穴五右共に三十

小腸の長三丈二尺左ふ回り滯滯ととと十六曲

胃之下口小腸の上口也臍上一寸ふあり水穀是

に於て入焉臍上一寸水分の穴と臍下小腸の

下口也是ふ至て清濁と別して水液へ膀胱に

手の太陽之脈は小指の端より起る手の外側と循る腕に上り踝中より

手の太陽之脈は小指の端より起る手の外側と循る腕に上り踝中より

小指の端より起る腕の穴に起る是より手の外側の前谷後谿と循る腕より上り踝中に出腕骨陽谷養老穴と

歴〇少澤は手の小指の外側の端に兎甲の角と去

一尺陷る中より前谷は手の小指の外側本節

の前陷る中より後谿は手の小指の外側本節

の後陷る中より腕骨は手の外側腕前起骨の下陷

る中より陽谷は手の外側腕中兎骨の下陷る

る中より養老は手の外側腕の上一空より腕後

一寸陷る中より

直に上り臂骨の下廉と循る肘の内側両骨の間に

上り臑外の後廉と循る肩解より出肩胛より繞肩上に交

脊の両旁と循る臂上の兩角と肩解より肩解の

下片骨と成る肩胛より一尺養老の穴より直に

上り臂骨の下廉支正穴に循る肘の内側両骨の間

より出小海の穴と歴上臑外の後廉と循る手の陽明

少陽の外より行肩より上り肩貞臑俞天宗秉風曲垣肩

髃

外の俞、肩中の俞、諸穴と循て乃ち上大椎小會を左
右に因て兩肩之上に相交り。○支正の腕後五寸
にあり。小海は肘の内大骨の外にあり。肘端と去る五分
陷たる中、肩貞は肩の曲胛の下、兩骨の解間、肩髃の
後陷たる中にあり。臑俞は肩髃と去る後、
大骨の下、胛の上廉陷たる中にあり。天宗は秉風の後、
大骨の下、陷たる中より、秉風は天膠の外、肩上的小
髃の後、にあり。臂と舉ると空あり。曲垣は肩の中央、曲
胛陷たる中より。之と按べ手に應じ、痛む。肩外
俞は肩胛の上廉脊と去る三寸、陷たる中より。大椎
は督脈に見えり。手足の三陽督脈之會

缺盆は入心と絡ひ、咽と循て、膈を下、胃に抵、小腸入屬
肩上に交てり。缺盆は入肩と循て、腋に下行て、腋中の分、當
心と絡胃系と循、膈を下、上腕中腕と過胃、抵下、任脈の外、下行、
上二寸の分、當小腸入屬、膈中上腕中腕並に仕脈の會穴に見えり。
其支は別、缺盆より頸と循、頰上、目の銳眥に至る。却て耳中へ入る。
目の外角と銳眥と。支は別、缺盆より頸の天窓、天容と循て、頰上
顙髃に抵て、上て目の銳眥に至る。瞳子髃と過却て耳中へ入る。
宮と循て終。○天窓、頸の大筋の前、曲頰の下、枝突の後、動脈去
應を陷たる中より。天容は耳の曲頰の後より。顙髃は面の頤

骨の下廉、兌骨の端陷るる中より、腫子膠、足の少陽經の
穴、聽宮、耳の中、珠子大と赤小豆の如くをふり

其文ハ、頰ハ別と頤ハ上と、鼻ハ抵て目の内眥に至る

目下と頤ハ、目の大角と内眥ハ、其文ハ別て頰と循り、頤ハ上り
鼻ハ抵て目の内眥、睛明の穴ハ至る、以て足の太陽ハ交る、睛明ハ
足の太陽經の穴

是動する病、聾、痛、頤腫、腮、頰、肩拔ふ似る、顴折
に似る、是液と主る、所生病ハ耳聾、目黃、頰腫、頤、頰、肩
顴、肘臂の外、後廉痛む、盛かるる人迎大とす口に再
倍と虚とる者ハ人迎反てす口より小也